ホワイトペーパー

歴史を作る：先進のシステムイン・パッケージ技術によってダイレクトRFコンバージョンが可能に

2021 年 4 月

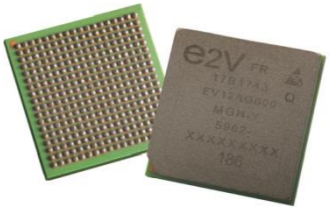
TELEDYNE e2v | Semiconductors
Everywhereyoulook™

抄録

ADC や DAC の性能仕様やフォームファクター、そして新たなセンサー技術（Rx、Tx）の進化とともに、RF データ変換システムも急速に変化しています。システムレベルの設計上の課題として共通しているのは、アナログ回路とデジタル回路の実装上のトレードオフにおいてバランスをとり、ソフトウェアおよびシステムの自由度（センサーからデジタル処理ユニットの入出力に至るまで）を最大限に高めることです。この根本的な課題を解決するには、システム設計においてデータ変換回路のコンポーネントを区画化（または結合）して、アナログおよびデジタル信号をルーティングし、複数の実装方法が可能になるようにソフトウェアリゼーションを最大限活用する必要があります。現在、高度な SiP（システムインパッケージ）組み立て技術を活用することで、データ変換システム設計の実装がハードウェア中心からソフトウェア中心へと変わりつつあります。Teledyne e2v では、SiP 設計、開発、組み立てのノウハウを活かし、最大限の柔軟性確保とマルチミッションへの対応に向けてシステムレベルでの設計に革命をもたらしています。RF、ミックスドシグナル、デジタル処理アプリケーションにおいて最先端の技術（フリップチップ、有機パッケージなど）を活用し、産業、医療、航空、計測、通信、軍事、宇宙アプリケーションを実現しています。Teledyne e2v には、40 年以上にわたる高度な SiP 設計および組み立て技術の経験があり、これらを活用することで、システム設計において最高の性能と価値を発揮する高度なデータ変換システムのプラットフォームを実現します。

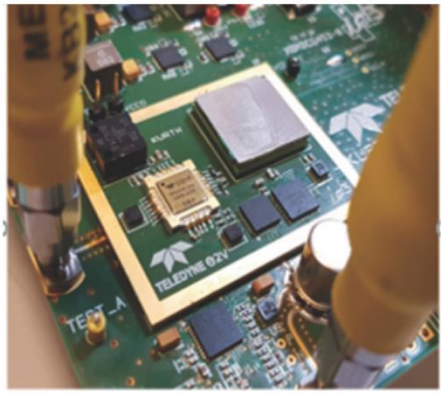
SIP 設計のための高度なデータ変換コンポーネント

高周波データ変換システムには、シグナルチェーン全体の重要な機能に対応する高性能で信頼性の高い半導体デバイスが必要です。SiP 実装には、システム全体の性能要件を満たす適切な半導体を選択することが不可欠です。Teledyne e2v では、高速データコンバータ、マイクロプロセッサ、メモリ、そしてさまざまなアナログおよびロジック機能を SiP 実装用に提供しています。



もちろん、データ変換受信（Rx）システムの中核をなすのは ADC です。Teledyne e2v は、20 年以上にわたってデータコンバータ技術に革新をもたらしてきました。そして、（上の写真にある EV12AQ600 のような）マイクロ波の周波数域で動作するマルチチャンネルでノイズや歪みの低い ADC を提供しています。このタイプのデータコンバータでは、周波数のダウンコンバージョンのために従来のアーキテクチャで必要だったアナログ段を、（ダイレクト RF コンバージョンによって）システム設計者は排除することができます。また、当社のハイエンド ADC ではアナログ段を削減し、高度な SiP 設計技術を標準ソリューションおよびカスタムソリューションとしてライセンスフリーで利用できます。これにより、標準製品およびカスタムソリューションを利用しながら、特定の性能品質要件や環境要件を満たす設計を実現できます。

今後、高速 SiP ダイレクト RF データ変換受信（Rx）ソリューションの中核を担うのは、EV12AQ600 です。実験用 SiP である RF フロントエンドレシーバ基板（下図）、PS620 は、RTH120 トラックアンドホールド増幅器（THA）と組み合わせることで、最高水準の性能を達成しました（使用デバイスの主なパラメータは 2 ページを参照）。EV12AQ600 はクアッドコア ADC で、クロスポイントスイッチ（CPS）フロントエンドを搭載しており、ADC の 4 つのコアを同時に、独立して、あるいはペアで動作させることが可能です。これにより、クワッドチャネルでは 1.6 GSps、デュアルチャネルでは 3.2 GSps、シングルチャネルでは 6.4 GSps で動作します。（第 2 高調波（H2）と第 3 高調波（H3）なしの）クワッドチャネルモードでの 5980 MHz までの SFDR は、-1 dBFS で 70 dBFS 以上を達成しています。



歴史を作る：先進のシステムイン・パッケージ技術によってダイレクトRFコンバージョンが可能に

2021 年 4 月

TELEDYNE e2V | Semiconductors
Everywhereyoulook™

EV12AQ600 は、民間商業市場から産業、軍事用まで、さまざまなグレードに対応します。さらに放射線耐性の必要な宇宙レベルの品質にも対応します。EV12AQ600 は、高速データ収集や高速試験計測だけでなく、自動試験装置、地球観測 SAR 衛星ペイロード、通信 MIMO 衛星ペイロード、超広帯域衛星デジタル受信機、C バンドダイレクト RF ダウンコンバージョン、マイクロ波ソフトウェア無線、ポイント・ツー・ポイント・マイクロ波受信機、機械状態監視システム、TOF 型質量分析計、LiDAR（光検出と測距）、高エネルギー物理学など、様々なアプリケーションに適しています。

使用デバイスの主なパラメータ

EV12AQ600 ADC

- 4 つの 12 ビット 1.6 GSps ADC コアにより、1、2、4 チャネルのタイムインターリーブをサポート
- 完全インターベールドモードによる 6.4 GSps までのサンプリング
- 6.5 GHz の入力帯域幅（-3dB）
- 統合された広帯域クロスポイントスイッチ
- マルチチャンネルの同期を実現する Sync チェーン

RTH120THA：

- 24 GHz の入力帯域幅
- デュアル THA によるサンプルクロックの半分以上の出力ホールドタイムを実現
- 完全差動型設計

最先端の高速 SiP データ変換送信（Tx）ソリューションを実現する上で重要な技術は、EV12DD700（右図）です。このデュアルチャンネル 12 ビット DAC は、最大 12 GSps の動作が可能であり、ダイレクト RF 出力信号発生は 21 GHz まで、フルスケールのステップ応答時間は 15 ps を達成していて、マイクロ波周波数の市場において最もノイズが少なく最高の性能を実現しています。EV12DD700 はデュアルチャンネル DAC で、Ka バンドまでの周波数にも対応しており、ビーム形成アプリケーションをサポートします。この DAC の出力帯域幅は、25 GHz までは 3 dB、25 GHz を超える領域でも 3 dB をわずかに上回る減衰量です（図 1 参照）。各 DAC とも一連の高度な信号処理機能を備えており、プログラム可能な逆 sinc フィルタによるダイレクトデジタルシンセシス（DDS）機能やプログラム可能な複素ミキサ、さらにデジタルアップコンバータと 4 つの補間ステージも搭載しています。デジタル処理機能としては、補間（比率 4X、8X、16X）、数値制御発振器（32 ビット NCO）によるデジタルアップコンバージョン（DUC）、ダイレクトデジタルシンセシス（DDS）、デジタルビーム形成、ビームホッピングがあります。DAC の主な特徴としては、プログラム可能な出力モード（NRZ、RF、2RF）、ゲイン調整、プログラム可能な SINC 補償機能、およびマルチデバイス同期があります。

3 種類の出力モードにおける DAC 出力特性

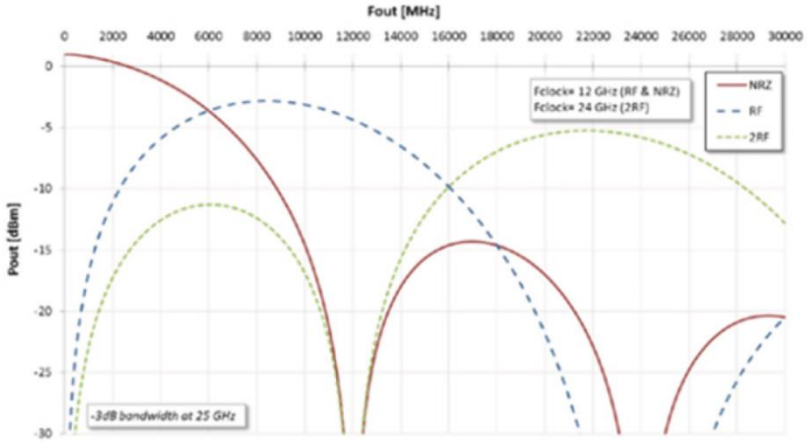
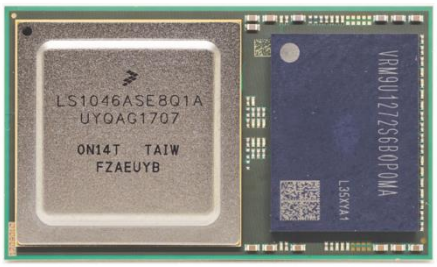


図 1

当然のことながら、高速データ変換システムには高度なデジタル処理能力が必要です。その例が、Teledyne e2v のリリースした LS1046A です。このマイクロプロセッサは、NXP の新たな Layerscape®シリーズからアップスクリーンして認定した製品で、-55℃～125℃で動作します（LS1046-Space も近日中にリリース予定）。LS1046A は NXP の 64 ビット Arm® Layerscape ポートフォリオの 1 つで、クアッドコア Arm® Cortex® A72 設計を採用しています。



この設計により、Arm®テクノロジーと互換性のあるソフトウェアサービス、アプリケーション、ツールの広大なエコシステムを、最高の性能かつ最もコンパクトなフォームファクターで利用することができます。LS1046A は 1.8 GHz で動作するプロセッサで、パケット処理のアクセラレータと高速周辺インタフェースを統合しており、その高性能なアーキテクチャと市場をリードする処理能力に定評があります。45,000 CoreMarks®以上の演算性能（1.8 GHz で 30K DMIPS）と、デュアル 10 Gb イーサネット、3 つの PCIe Gen3、1 つの SATA Gen3 とを組み合わせることで、高い信頼性が要求される軍事航空（および宇宙）アプリケーションに最適です。LS1046A は、Teledyne e2v の最新の Qormino®計算モジュールにも採用されており、4 GB の DDR4 メモリも搭載されています（左の写真参照）。さらに、Teledyne e2v の半導体ライフサイクルマネージメントプログラム SLiM™の一環として、このデバイスの寿命は 15 年以上にわたりサポートされ、コストがかかりがちな生産中止や保証対象外という問題を回避できます。

すべての市場で必要となるデータコンバージョン SiP を実装したシステムのピーク性能

データ変換システムは、産業、医療、航空、計測、通信、軍事、宇宙など様々な分野で使用され、急速に変化しています。どの市場区分にも共通するシステムレベルにおける設計上の課題は、アナログ回路とデジタル回路の実装上のトレードオフのバランスをとり、ソフトウェアやシステムの柔軟性（センサーからコンピューターへの入力、またはコンピューターからセンサーへの出力）を最大限に高めることです。この根本的な課題を解決するには、システム設計において、データ変換回路のコンポーネントを区画化（または結合）して、アナログおよびデジタル信号をルーティングし、複数の実装方法が可能になるように、ソフトウェアリゼーションを最大限活用する必要があります。

システム設計エンジニアは、市場やアプリケーション、ハードウェアの仕様等の要件を理解していますが、一方で、高性能データ変換システムに関連するリスク、技術の選択、フォームファクター、開発スケジュール（スケジュールの同期化を含む）、信頼性、コストなどの設計パラメータは非常に変わりやすいものです。これらの設計パラメータと、変化し続けるシステム性能の仕様要件とを合わせて考慮すると、最終的に設計実装の「重なり」の部分が絞り込まれてきます（図 2 参照）。もちろん、どのような設計パラメータであっても、ミスがあれば非常に大きな損失につながります。このため、実際にプロジェクトの全体的な価値を高め低下させないのであれば、設計開発段階から自由度を確保することは十分投資に値することなのです。

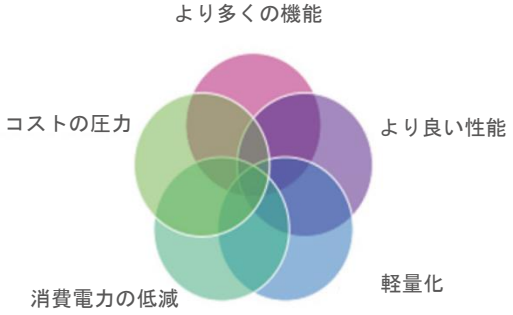


図 2 - 設計パラメータとシステムレベルの性能要件を高めると、実装の「重なり」の部分が絞り込まれる

開発段階から自由度を高め最終的に市場で要求される性能要件を満たすことが可能な設計手法の 1 つは、特にデータ変換システムにおいては SiP（システムインパッケージ）技術を利用した機能を実装することです。これまでシステムレベルの設計者は、進歩し続ける半導体プロセス技術により、SoC（システムオンチップ）に完全な回路機能を実装してきました。特に負荷の高いデジタル演算が必要な SoC アプリケーションは、ゲート長が 10 nm 以下の半導体技術を用いて実現されてきました。しかし残念ながら、半導体がコンパクトになるにつれ、チップ開発コストは指数関数的に増加します（図 3 参照）。

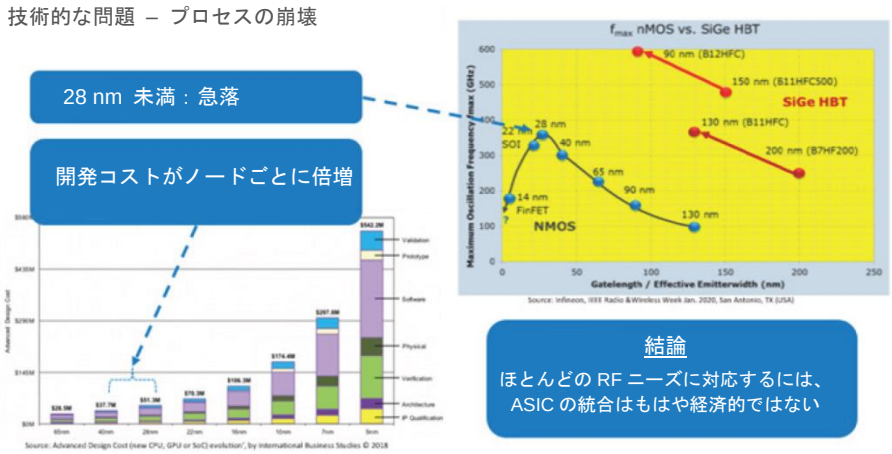


図 3

図 3 は、最小ジオメトリのゲート長とデバイスの最大発振周波数との相関も示しています。この図からは、Fmax がゲート長 28 nm 未満で急落していることがわかります。それとともに、開発コストはゲート長が短くなるにつれて指数関数的に増加します（平均開発コストは、例えばゲート長 28 nm では 5130 万ドル、ゲート長 16 nm では 1 億 630 万ドル、ゲート長 7 nm では 2 億 9700 万ドル、ゲート長 5 nm では 5 億ドルを超える）。

このため、オンチップ機能が増加するにつれゲート長を短くする必要があり、SoC 開発コストは膨大になります。例えば携帯電話業界では SoC が主流でしたが、MEMS センサーなどのアナログ技術への要求が高まるにつれ、SoC から SiP 実装へ移行する傾向が生まれています。図 4 では、現在 SoC から SiP 実装への移行を促している 3 つの共存設計パラメータを示しています。その 3 つとは、1）技術：最適なシステム性能を実現するための適切なプロセス技術の選択（Si、GaAs、GaN、SiGe など）、2）微細化、3）コストです。

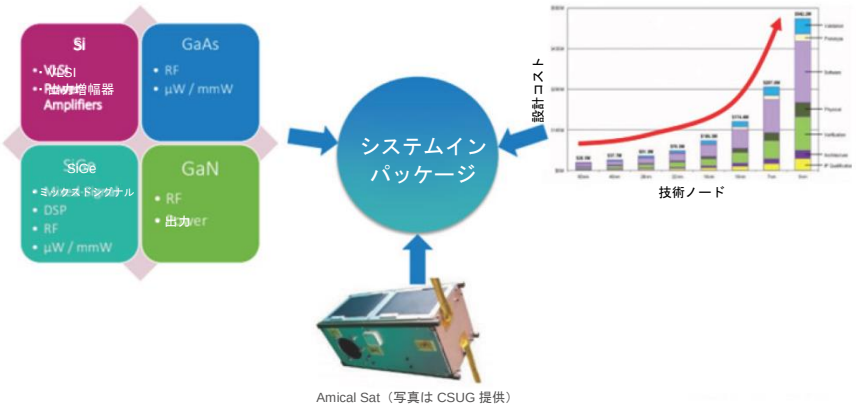


図 4

データ変換システムの開発が SoC から SiP 実装に移行している要因は、もう 1 つあります。その要因とは、データ変換回路コンポーネントを区画化（または連結）することが必要になったからで、アナログおよびデジタル信号をルーティングし、複数の実装方法が可能になるようにソフトウェアリゼーションを最大限活用する必要があります。簡単に言えば、データ変換システムは、「集中型」または「分散型」システムとして設計することができるのです（図 5 参照）。集中型データ変換システムでは、アナログ信号のルーティングが必要なため、クロストークや歪みの影響を受けやすくなります。これに対し分散型データ変換システムでは、ADC を Rx センサーに、DAC を Tx センサーに配置できることから、デジタル信号を基板上で、軽量でコンパクトな高速データレートのファイバ接続によってルーティングすることが可能です。

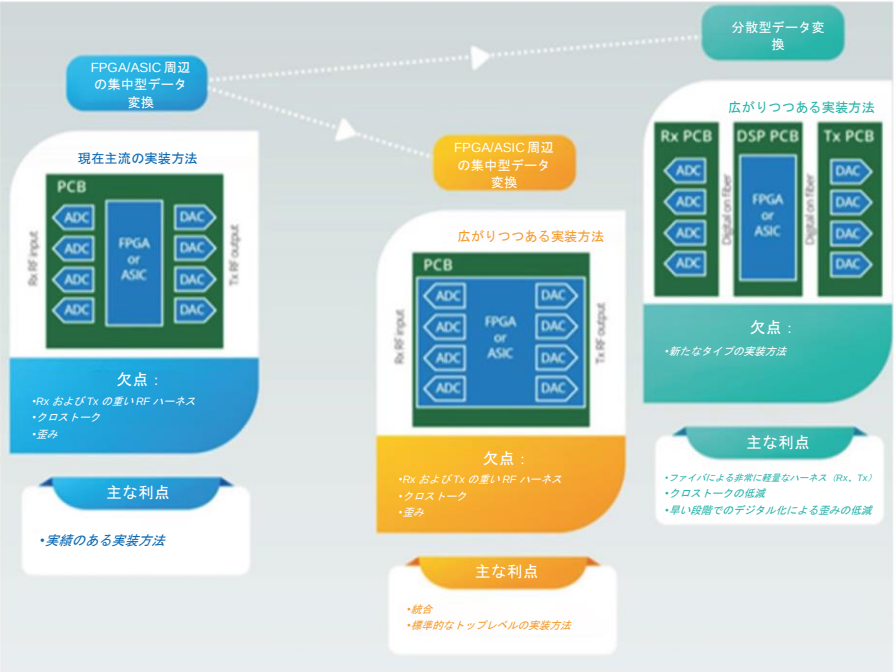


図 5

その結果、Teledyne e2v の高度な SiP 設計、開発、組み立てのノウハウは、データ変換システムの開発に革新をもたらし、マルチミッション機能のための設計パラメータの自由度（連結や区画化など）を最大限に高めてきました。RF、ミックスドシグナル、デジタル処理半導体をワイヤボンディング、フリップチップなどの最新技術を活用して連結（または区画化）することで、高度な SiP 設計および組み立て技術により、高周波データ変換システムのプラットフォーム設計が低コストで実現でき、かつ最高のパフォーマンスをもたらします。

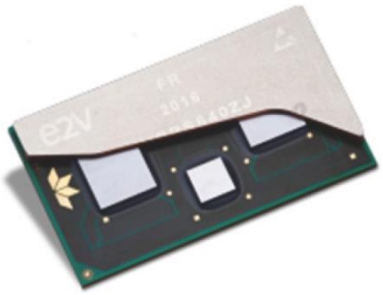


図 6a

例えば、図 6 に示す PS640 は現在開発中の SiP 実装の RF データ変換システムで、将来的には L から Ka バンドまでの高周波レシーバ（1 GHz～40 GHz）として使用できます。

PS640 は Teledyne e2v の設計した新たな THA を STMicro BiCMOS055 プロセスで利用し、2 つのインタリーブされた EV12AAQ600 ADC を「集中型」高速 SiP データ変換レシーバ（Rx）として実装しています。図 6 には、性能仕様の測定値も示しています。図 7 は、同じデータ変換システムが、将来的に「分散型」データ変換レシーバとして実装された場合の概念を示しています。デジタルプロセッサ（FPGA）を駆動する（SiP に搭載された）光学エンジンを利用して、最大のソフトウェアリゼーション（ソフトウェア中心とすること）を実現します。

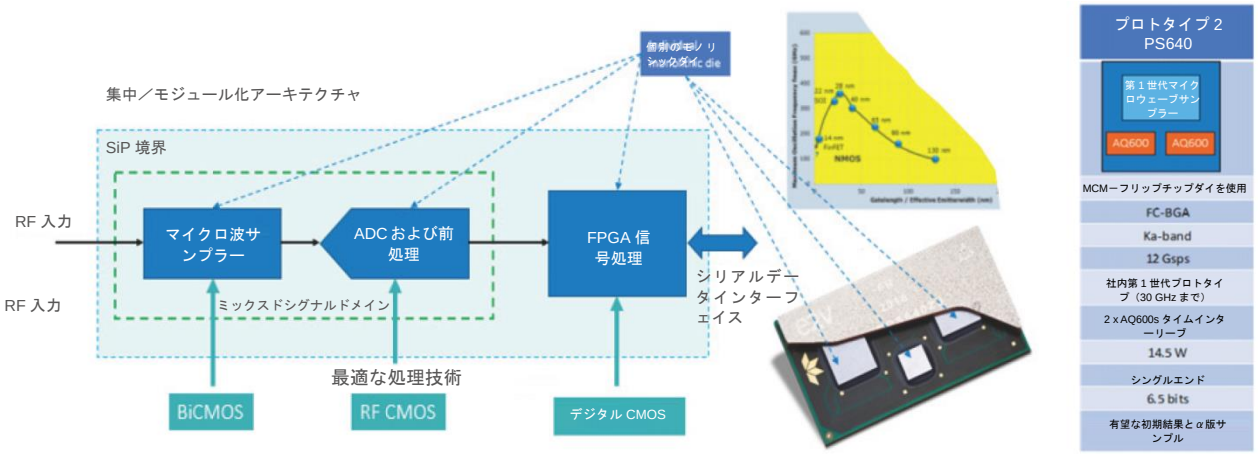


図 6

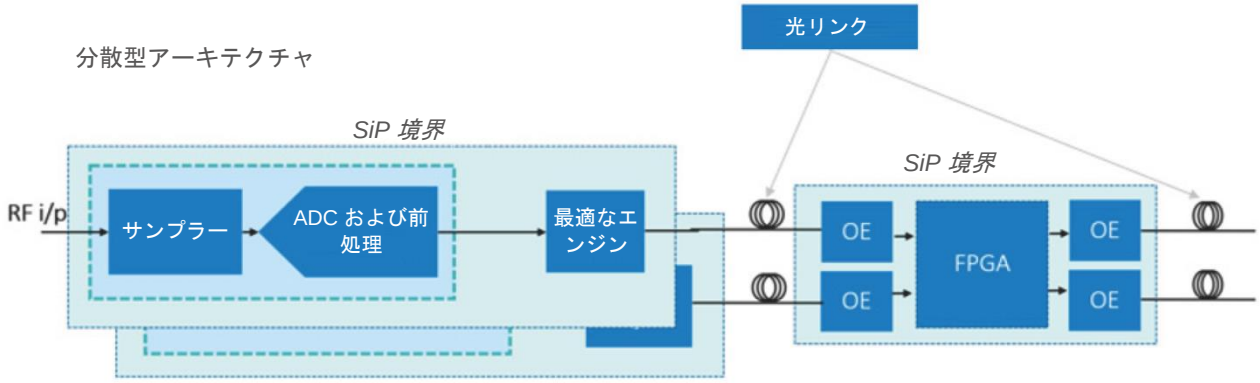


図 7

Teledyne e2v の高度な SiP 組み立て技術

SiP は複数の素子（受動および能動）を連結して 1 つのパッケージにまとめた単一のデバイスで、電子システムレベルでさまざまな機能を実現します。SiP に組み込まれる半導体デバイス（受動素子を含む）は、基板上に水平または垂直に実装された後、パッケージ化されます。半導体と基板素材とは、ワイヤボンディングまたははんだバンプ（この場合はダイスを垂直に積むことも可能）で接続します。

前述のように、データ変換 SiP には、プリアンプ、ミキサ、ADC、DAC、専用のプロセッサ、メモリ集積回路に加え、抵抗器やコンデンサなどの受動素子も含まれています。これらはすべて同じ基板上に、さまざまな方法で取り付けられています。SiP 組み立て技術はあらゆる市場に進歩をもたらし、特に超高周波（地上および地上以外）、MEMs 回路を必要とする IOT（モノのインターネット）、モバイルおよびウェアラブルデバイスなどのアプリケーションで活用されています。SiP 技術を利用した製品とパッケージソリューションにはさまざまなものがあり、Teledyne e2v は産業、医療、航空宇宙、軍事、科学、宇宙アプリケーションなどの分野で設計および組立サービスを提供しています。また、Teledyne e2v の製品の多くは、NXP、Everspin、Micron といった企業との戦略的パートナーシップを通じて開発されています。

Teledyne e2v では SiP 設計開発用のサプライチェーン・マネジメントサービスを幅広く提供しており、そのラインナップには、ダイ設計、パッケージ設計、高信頼性組み立て技術、高性能の実測度テスト、品質認定サービス、SLiM™ブランドの半導体ライフサイクルマネージメントなどがあります（図 8 参照）。Teledyne e2v には 40 年以上にわたる宇宙向け ADC、DAC、マイクロプロセッサ、メモリの設計と、社内試験および認定サービスの経験があります。その経験によって、あらゆる認定レベルの要件に対応した高度な SiP 製品およびサービスをあらゆる市場に提供することができます。Teledyne e2v の高度な SiP 組み立て技術には、ワイヤボンディング、フリップチップ、有機およびセラミックパッケージ（ハーメチックおよびノンハーメチック）などがあり、さらに多様なデバイスを統合して組み立てることも可能です。

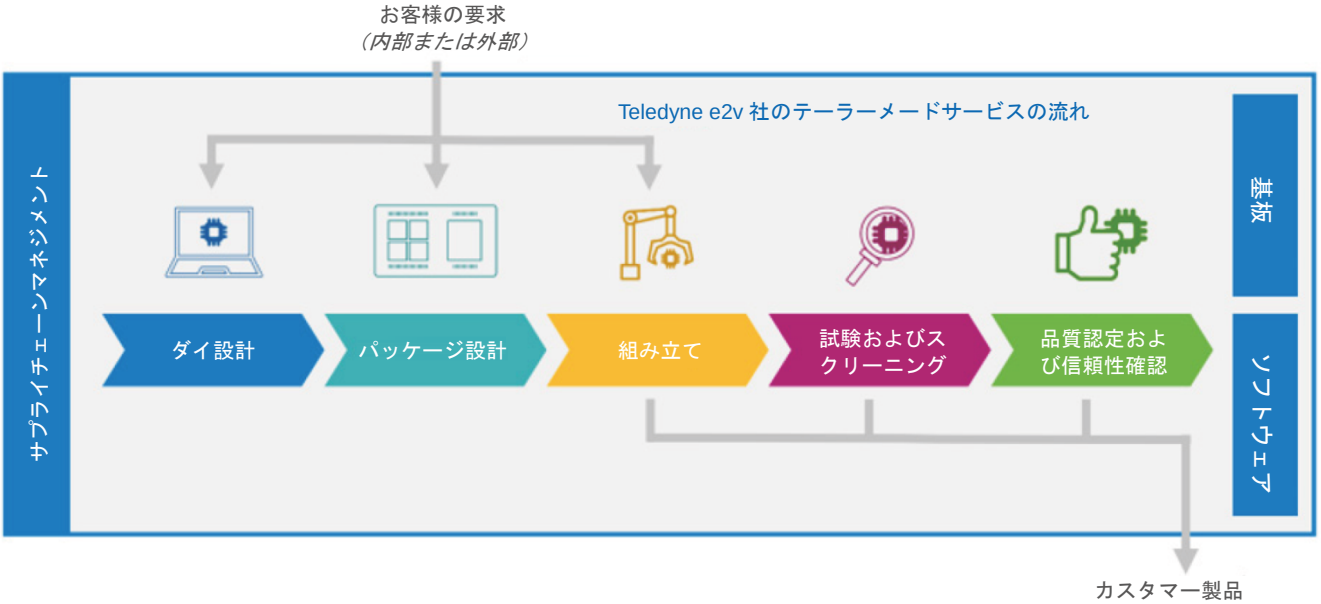


図 8

もちろん、高度な高速 SiP の開発では、組み立て前にパッケージ特性を測定するとともに、シミュレーションによって熱と信頼性の双方を検討する必要もあります。前述の PS640 の熱シミュレーションの例を図 9 に

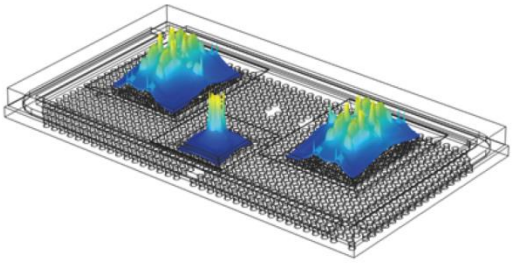


図 9 - PS640 SiP の伝熱シミュレーション

示します。複数のダイを近接して配置することは、熱設計の面で難しい課題です。コンポーネントの最もクリティカルな接合部の温度予測には、できる限り詳細な熱伝導シミュレーションが必要です。Teledyne e2v では境界条件を利用し、システム設計者やお客様とともに検討しながら、最終的に測定値と適合するような性能のシミュレーションを目指します（SiP の実装により組み込むコンポーネントに必要）。また、RF SiP 開発のシミュレーションと設計において、高周波 3D フィールドソルバ（Ansys HFSS）も活用しています。HFSS は市販の有限要素法による電磁的構造のソルバで、SiP パッケージに含まれる複雑な RF 電子回路や半導体素子、フィルタ、伝送線路などのパッケージ設計に使用されます（右図 10 参照）。この例では、Teledyne e2v の SiP プロセス開発のフローに沿って、パッケージチームと半導体設計チームが協力し RF アナログフロントエンドを共同設計しました。

SiP の信頼性を確保した設計はエンジニアリング上の大きな課題です。1 枚の有機基板にはさまざまなシリコン技術が搭載されており、C4（controlled collapse chip connection：はんだバンプを使用したフリップチップによる接合）および C5（はんだボール）の電気機械的インターフェースに RoHS 適合のはんだ接合が形成されています。Teledyne e2v では高度な技術の開発を続けており、はんだクリープや粘塑性などの非線形挙動を考慮した熱機械解析により、歪みの迅速かつ正確な予測や基板レベルでの信頼性の確保を目指しています（図 11 参照）。

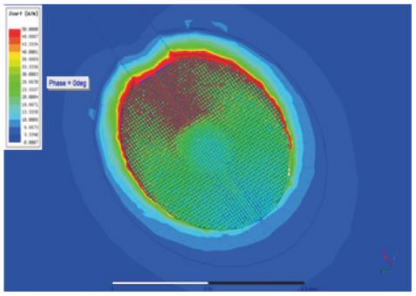


図 10 - 3D フィールドソルバ（Ansys HFSS）を使用したシミュレーションの抜粋。PS640 に 40 GHz のアナログ入力をした場合の THA のパッケージとシリコンダイ間の移行を示しており、シリコンメタルフィリング中の信号伝搬が解析されています。

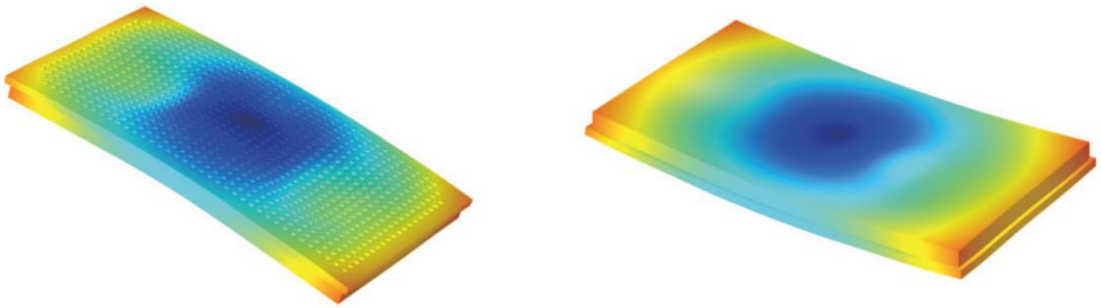


図 11 - 室温で組み立てた後の PS640 パッケージの歪みを 50 倍に拡大した図

専門的な設計および組み立てサービスでは、カスタム製品、少量から中程度の量、高信頼性／ハイエンド、QML-V および QML-Y 認証、宇宙グレード認定などに対応します（下図 12 の技術概要も参照）。

ウェハバックエンド

- 全自動：ソーイングおよび UV 照射
- 先進的な洗浄液
- 目視検査

表面実装デバイス

- 自動プリント装置、3D スクリーン技術
- 全自動チップシューターによる表面実装
- シングルパッケージおよびパネル工程
- 雰囲気制御マルチゾーンオーブン

組み立て

- 非常に長いダイ
- ガラス蓋による封止
- 光学シールド位置決め
- 光学フィルタ組み立て品
- 自動化されたライン

スクリーニングおよび品質認定

- バーンイン、温度サイクリング、サーマルショック
- 移動体粒子検出および目視検査
- 密封試験
- ロット検証試験
- 宇宙グレード・軍事グレード品質認定

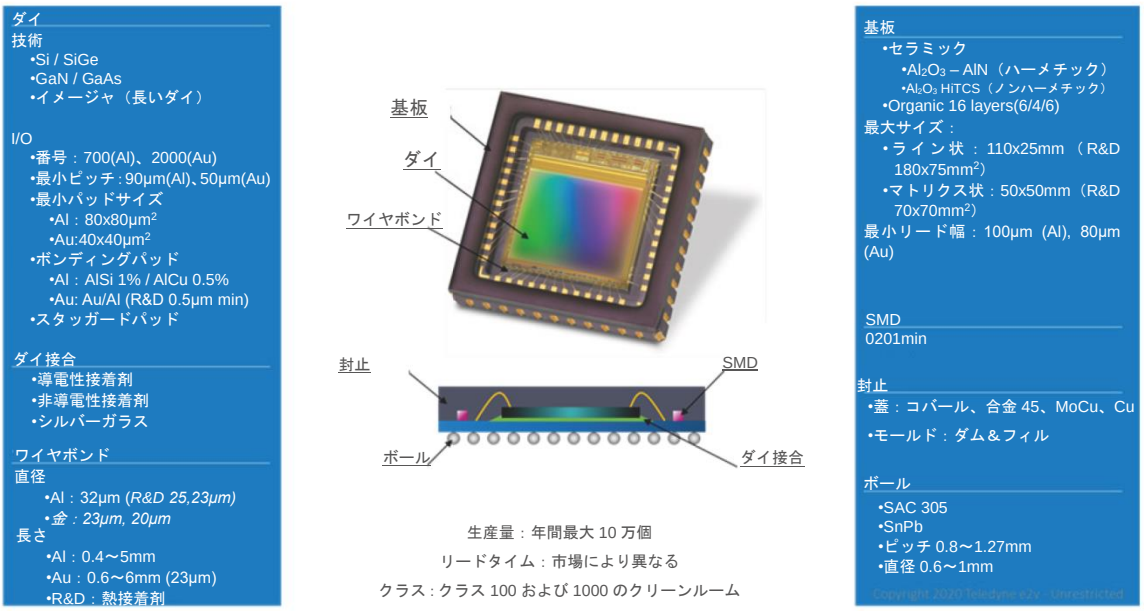
試験および測定

- ウェハプローブ 6 インチおよび 8 インチ、パッケージ試験：Teledyne IP750
- CCD および CMOS
- 完全な電気光学特性評価のための専用ベンチ
- 幾何学的測定

ライフサイクルマネージメント

- 安全な専用保管場所
- 長期間にわたる供給方式
- ウェハ保管から始まる 20 年以上の供給実績

図 12 - SiP 組み立てに利用される Teledyne e2v の高度な組み立て技術



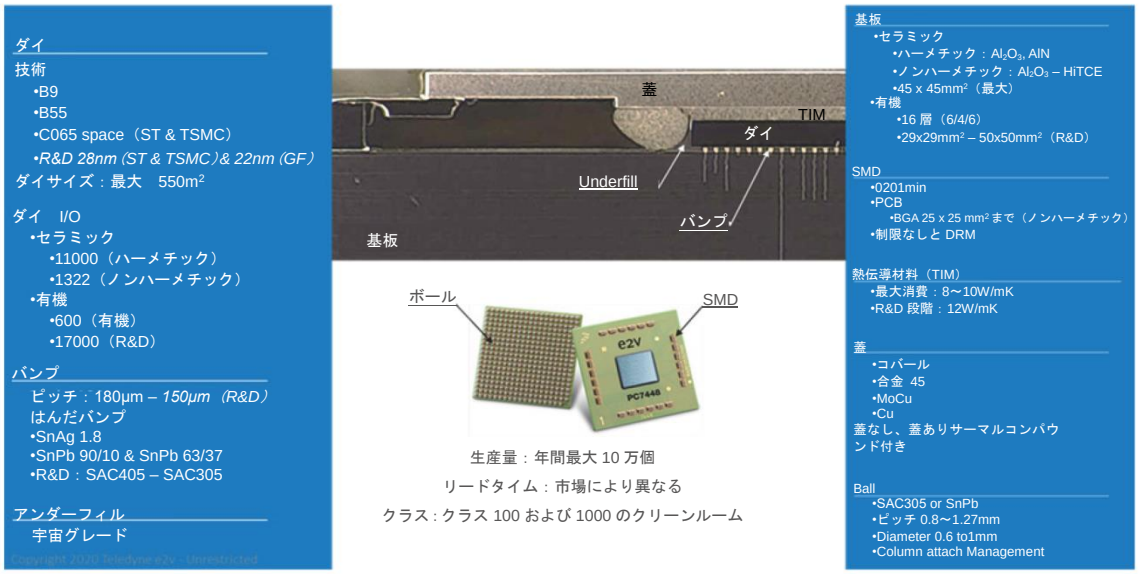


図 13 - Teledyne e2v のワイヤボンド（上）およびフリップチップ（下）による高度な組み立て技術、SiP 組み立てに利用可能

図 13 に、Teledyne e2v の先進的な SiP ワイヤボンディングおよびフリップチップ組み立て技術を示します。ワイヤボンディングに関しては、図 13（上）に示すように、必要な半導体のタイプ（Si、GaN、GaAs など）やパッケージタイプに合わせた最先端の組立には、さまざまなバリエーションの技術が必要となります。新たな世代の半導体やパッケージがリリースされると、その性能要件を満たす新しいワイヤボンディング技術の開発が必要になります。ワイヤボンディングは、フラッシュメモリーやセンサーなどの電子部品のパッケージ組み立ての約 3 分の 2 を占めています。シリコンノードの中には、MEMS センサーなどのコンポーネントのように、高度なフリップチップ接続ができないものがあります。このような場合でも、コストや信頼性の面でワイヤボンディングが有利です。

フリップチップ技術（前述の図 13）では、半導体の上にバンプアレイや銅ピラーを形成します。フリップチップの製造は従来の IC 製造と似ており、IC 製造の工程にいくつかの工程を追加したに過ぎません。製造工程の最終段階の前には、接合用パッドに金属をつけるなどの準備をして、はんだが付着しやすくするように加工します。その後、ウェハプロセスの最後に、はんだバンプをウェハ上面のチップパッドに配置し、通常の工程どおりにチップをウェハから切り出します。このチップを外部回路（SiP 回路基板や他のチップ、ウェハなど）に実装するため、チップを裏返して上面を下に向け、パッドが外部回路の対応するパッドと向き合うように位置合わせをして、はんだをリフローして接合を完了します（通常は、超音波熱圧着または代替のリフローはんだプロセスを使用）。またこのプロセスでは、チップ回路とその下のマウントとの間にわずかな空間が残るため、多くの場合、電気的に絶縁する接着剤を「アンダーフィル」することで機械的接合強度を高め、ヒートブリッジを形成してチップやシステムのはんだ接合部に熱勾配による応力がかからないようにします。アンダーフィルにより、チップと基板の間にある熱膨張の不整合を分散させ、早期故障の原因となるはんだ接合部への応力集中を回避します。フリップチップ技術は、ワイヤボンディングとは異なり、チップを上向きにして、チップパッドと外部回路をワイヤーで接続する技術です。

Teledyne e2v：ワンストップショップとして、高度な SiP 設計および組み立て技術サービスを提供

SiP では、他の設計オプション（SoC など）と比較して、特定の製品やシステムの性能寿命にかかるコストを全体的に削減できます。SiP には、以下のように、製品ライフサイクルのあらゆる段階で、システム開発コスト全体を削減できるメリットがあります。

1. エンジニアリングコスト削減：技術開発にかかる時間や材料を節約でき、また市場投入までの時間を短縮できることから、設計完了までの労力を大幅に低減できます。
2. プリント基板回路コスト削減：（COTS またはカスタム半導体を利用することで）特定のコンポーネントの開発や利用を簡素化できます。
3. 組み立てコスト削減：複数のコンポーネントを単一のパッケージに統合することで、システム製造の全工程におけるコストを大幅に低減できます。
4. サプライチェーンコスト削減：サプライチェーンを簡素化できます。異なるメーカーから調達していた複数のコンポーネントを単一の SiP 実装に置き換えられます。管理するコンポーネントとサプライヤーが減ることで、サプライチェーンを劇的に簡素化できます。
5. 検証：サブシステムおよびシステムレベルでの試験と品質認定を行います。

Teledyne e2v の先進的な SiP 設計と組み立てサービスは、すべての市場区分や製品種別にとっての「ワンストップショップ」となります（図 14 参照）。つまり、Teledyne e2v は宇宙グレードアプリケーションの設計、組み立て、品質認定サービスを提供しているため、他のすべての市場分野、アプリケーション、および品質レベルにも対応できるということです。

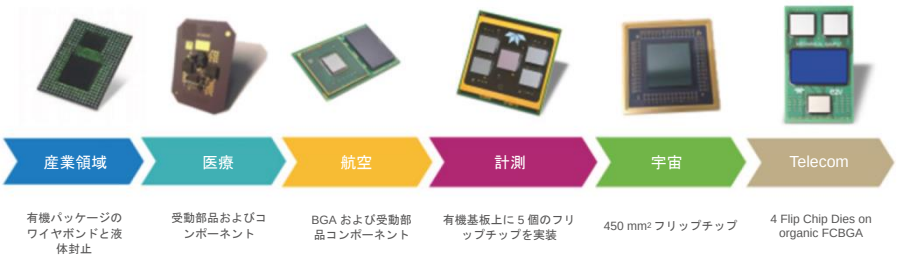
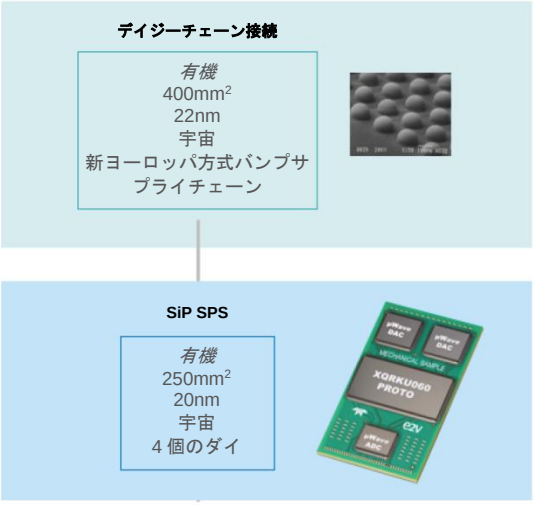


図 14

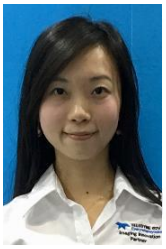
SiP 技術を利用した先進的なシステム開発が新たな 10 年を迎えようとしている今、ゲート長の微細化が進むことで、半導体の面積が拡大するデバイスを組み立てることが非常に重要になっています。ますます大型化する SoC は、SiP に含まれる多数のコンポーネントの 1 つになりつつあります。そうなると、有機基板やパッケージ材料を利用して信頼性のある組み立て（ワイヤボンディングまたはフリップチップ）を行うには、大規模な技術投資が必要になります。現在、Teledyne e2v は今後数年間に見込まれるこれらの技術進歩（右図参照）に対応すべく準備を進めており、この技術開発がすべて ESA によって支援されています。



結論

現在、データ変換システムの設計者は、半導体プロセスの選択（および幾何学的配列）や回路の小型化への要求、さらに増加の一途をたどる開発コストなど、重大な設計パラメータの課題に直面しています。さらに、新たな ADC、DAC、マイクロプロセッサ、メモリコンポーネントが続々と登場し、高度なシステム開発で利用可能になっています。産業から医療、航空、計測、通信、軍事、宇宙アプリケーションに至るまで、どの市場区分にも共通するシステムレベルにおける設計上の課題があります。それは、アナログ回路とデジタル回路の実装上のトレードオフにおいてバランスをとり、ソフトウェアやシステムの自由度（センサーからコンピューターの入出力に至るまで）を最大限に高めることです。現在、高度な SiP（システムインパッケージ）組み立て技術を活用することで、全ての市場区分やアプリケーションにおいて、データ変換システム設計の実装はハードウェア中心からソフトウェア中心へと変化しつつあります。Teledyne e2v では SiP 設計、開発、組み立てのノウハウを活かし、最大限の柔軟性の確保とマルチミッションへの対応に向けて、システムレベルの設計に革命もたらします。Teledyne e2v には 40 年以上にわたるパッケージ設計の経験があります。RF、ミックスドシグナルとデジタル処理アプリケーションにおいて、最先端技術（ワイヤボンディング、フリップチップ、有機パッケージなど）を活用してきました。Teledyne e2v の先進的な SiP 設計と組み立て技術は、高周波およびダイレクト RF データ変換システムプラットホームのシステム設計において、最高の性能と価値を提供します。

お問い合わせはこちら：
Yuki Chan,
マーケティング＆コミュニケーション
マネージャー
Yuki.chan@teledyne.com



お問い合わせはこちら：
Marc Stackler,
アプリケーションエンジニア
シグナルプロセシングソリューション
Marc.stackler@teledyne.com